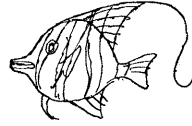


# 幼児の権利は侵されている

ロバート・J・フィッツジャー



イブシランティのイースト・ミシガン大学教育学教授、ロバート・J・フィッツジャーは、過剰定員や、二部授業（かけもち）や、学力達成に方向づけられたお勉強主義の課程にはげしく憤慨している幼稚園の教師たちを支持している。幼稚園の教師や児童発達分野の教授や研究者たち、また幼児の権利を守るために親自身の自己満足的な学力主義をよるこんで捨てようとする両親たちからなる、新しい推進グループを形成すべきではないか。（「行動の計画」一九六四～六七、子供の教育一九六四年十一月号一三九頁参照）

われわれの学力主義にとりつかれた文化は、児童中心の課程の、最後のとりでを侵しているのだろうか？ 幼稚園までもが、

学校主義的な優越性の圧力の前に、屈服しようとしているのだろうか。

さきごろ、教員の研修会で、一人のベテランの校長が、大講堂にあふれる幼稚園と小学校一年の教師たちに挨拶した。

彼は、学校の管理経営上、多くの問題にあれこれとなやまされてとくにたえ難い日や、とりわけて挫折感にくずれ折れるタペを、忍耐してのりこえねばならないとき、必ず翌朝、幼稚園でし

ばらくの時を過ごすことにしていると述べた。彼は幼児のバイタリティー、自発性、すがすがしいユーモアにふれると、気持ちの新鮮さをとり直して、教育の戦場にもどることができるのである。

型にはまらない学習のためのとりで

幼稚園は、子どもというものは、型にはまらないやり方で学ぶものだと思っている教師にとって最後のとりでとなってしまう

た。そういう教師たちの幾人かは、あまりにも多くの初年級の教室を特徴づけている。お勉強偏重からにげ出してしまった。少なくとも、幼稚園では、教師は、ゆっくりしか発達しない子ども、ゆっくりした発達にも、きらくにかまえていられるのである。

最近に至るまで、幼稚園の子どもたちに、一連の、最低限の学業的要目（ミニマム・エセンシャル）を強制するようなことはなかった。従って、教師たちに、子どもたちをしめ上げて、子どもたちに形式的なレディネスの単調な作業を強いるような、あまり大きな圧力はかかっていなかった。熟達した幼稚園の教師は、生きることで成長すること、という大切な仕事に従事し、子どもたちを導き、一年をすごした、と感ずることができたものだ。子どもたちは仕事をする時間があり、遊ぶ時間があった。食べる時間、休憩したり、うたったり、踊ったり、あらゆる魅惑的な小道を探険したりする時間があった。

お互いに影響しあうことを学ぶ時間―計画したり、試したり、自然な好奇心を育てたりする時間があった。新発見の大きなよろこびを楽しむ機会があったし、ついこのごろ身につけた腕前や実力を試してみるスリルも味わった。また、新しい追求目標に到達する機会もあった。要するに、幼稚園は、教師と子どもとが遠慮なくいっしょになって仕事したり遊んだりしながら、その間に教

師は幼児期の発達課題を次第に助成していく、そのような場所だったのである。

幼稚園で保育するすべての教師が、その責務をこのように解釈しているわけではない。中には、強制されることなしに学ぶという自由のとりでを求めたことのない教師もいる。幼稚園の主目的は、子どもをおとなしくしずめておくこと、だと思っている教師―子どもたちを、自分の席にすわって注意深くしているようにしつけ、将来学校に順応するための適当なお作法、お行儀を教えこむことが、主要なつとめだと心得えている教師もいる。あるいはまた、形式的なワーク・ブックに一生懸命しがみついて、学校のお勉強の準備ができている状態にすることが、幼稚園の教育課程の目標であると考えている教師もある。ある人々は幼稚園のあり方の基本的原理を理解せず、受け入れようとしない。またある人々は、大へん強制的で、すすんで昔のお勉強病の症候群を採用してしまっている。

### なぜそんなに急ぐのか？

近年、お勉強主義の圧力は、年齢的段階を下に向かって追いこんでいる。我々は、もっとももっともつめこむこと、そして形式的にかっこいい発達をより早くから導入することに関する、あらゆる

論拠を聞かされてきた。これらの論拠がある程度意味をもって  
ることは疑えない。幾人かの子どもは、我々がかつて考えたこ  
ろよりは早くから、読む用意が整っている。人や場所や事物にた  
くさんに接した生活経験のおかげで、子どもは、彼らをとりまく  
世界に関する知識を、以前よりはずっと多く身につけて学校へや  
ってくる。

若干のアメリカの子どもたち——特に中流階級の子どもたち  
——は、就学に先だって、すでに、形式化された教育を吸収する  
ことができるのにはちがいない。注しかもなお、基本的な問題  
は、「我々はなぜ急ぐのか？」である。

しかし早期からのお勉強主義の圧力に抵抗を試みているベテラ  
ンの幼稚園の教師たちがまだ多勢いるのだから、我々は全く希望  
を捨てる必要はない。これらの教師たちは、発達に必要なものに  
干渉する圧力に抗議することのできない、未熟で不幸な子どもた  
ちに、著しい関心をよせている。

注・若干の子ども、恐らくは幼稚園にはいる五〇人のうちの  
ひとりくらいは、すでに読むことをはじめているのにならな  
い。しかし、このひとりにできるということが、他の四九人  
の子どもにとつての、よい学習経験を、変更させるほどの効  
果としてとりあげられるか否かは、大いに疑わしい。(ウィリ

アム・D・シェルドン、「幼稚園で読書??」——ワシントンD.C  
国際幼年教育協会一九六二、十四頁)

誰が圧力に抵抗している教師たちを支持するか？

憂慮すべき問題は、多くの幼稚園の教師が勇気を失わせられて  
いるという事実である。

誰が、これらの教師たち、またその教え子たちのための弁護を  
するのだろうか？

彼らは、両親のゆきすぎた関心の流行や、ホビュラーな雑誌  
の、早くからの読書に関する記事や、幼児におけるあらゆる早教  
育の可能性を「証明」する研究課題に関する出版物、そして、仕  
事の上での同僚のがっかりさせるような理解のなさをあいてにし  
て、いかに戦えばよいのか？

若干のすぐれた幼稚園の教師たちは、文字通り身をすりへらし  
ている。こんなに多くの子どもをもっていたら家庭と学校の協力  
のためには必須である。両親との連繫を保つための時間さえ、十  
分に持つことはできないであろう。

最も勇気を失わせるものは、あまりにも多くの教師たちが遭遇  
する、孤立することである。幼稚園の教師たちが集まったとき、  
常に彼らは、かけもち(二部授業)や、つめこみ教室や、最近の

当局の規定や、彼らに対する最も新しいおしつけられた要望事項一式の、覚え書を見せあう。彼らは圧力はよく感じとるが、それに抵抗しようとする彼らの意図は、ほとんど支持されないのである。

もちろん、幼い子どもたちは、あまりにも多すぎる圧力に対しては、彼ら自身で抵抗する。しかし、そのような抵抗は、しばしば不適応の徴候となつてあらわれるのである。そしてそのように強いられた教師たちのフラストレーションはいつそう高まつていく。

もし、このような学力主義に対する怒りを発展させるなら、なぜ新しい圧力団体（推進グループ）をつくらないのか？ それは幼稚園の教師や、児童発達分野の教授や研究者たち、そして親自身の自己満足の野望を、子どもへの愛のためによるこんで放棄しようとする数少ない両親たちによって構成されることが可能である。そのグループのはたらきは、早くから学校的な学習をするような、多くの文化的要請を鈍らせることによって、子どもが、子どもにふさわしい活動をする権利を守るために、ささげられるであろう。

（西南学院大学短期大学部・高橋さやか訳）

【訂正】 本誌八月号表紙裏の「保育学年報」広告中「第17回福岡大会……」は第19回の誤りでしたので、ここに訂正しお詫びいたします。

## 倉橋惣三選集第四卷

定価 700 円

フレーベル館発行

### 内容目次

#### ☆ 保育案

☆ 短言……子どものための人形

・窓 ・この秋 他

☆ 戦中小篇……保姆諸君と語る

(1) 健康 (2) 服装 (3) 熱意

・おもちゃ大学 他

☆ 戦後小篇……小問答「とんでもない」

・保育の味 他

☆ 論説……彼らもまた美を求む

・幼稚園の新使命 他

☆ 実際篇……系統的保育案解説

・幼稚園でしていること 他

☆ 初期の著作……新しき心 他

☆ 作詞・書簡・揮毫

☆ あとがき